

種 芸

鈴木幸一さん(60)

—栃木県益子町



◆ソバで地域活性化 40歳を過ぎてソバ栽培に取り組み、「他のものより良いものを」との思いから、低温低温で時間をかかると風味豊かに仕上がりが石臼ひきで製粉し、全国に卸している。多くの人を知ってもらおうと、07年から「益子の新ソバ祭り」を始め、人気を集めている。最近、ソバ粉を使った洋菓子も開発。6次産業にも乗り出している。

エチ工農産(越江雅夫代表取締役社長)

—京都府京丹後市



◆特別栽培米を販売 土作りと自ら作る経営を重視し、できるだけ農業を使わない特別栽培米「おわかに米」を販売。12種類の野菜でエコファーマーの認定を受け、京都府立医大などに納入する。越江さんは07年に同社を設立。水田80%からのスタートだったが、畑作にも挑戦。現在、受託を含め40%の水田、7%の畑を耕す。

やさか共同農場(佐藤隆代表)

—島根県浜田市



◆弥栄ブランド 浜田市弥栄町でみそ用の大豆や麦、米を有機栽培し、農家の施設で製品にして販売。味と品質が評判になって売上げが伸び、みその販路に乗せて有機野菜も販売する。都市部との間にできたルートで消費者をつかみ、体験農業の機会を設けて、弥栄ブランドを増やした。社員、パート計30人が働き、雇用の場も生んでいる。

勝部農産(勝部喜政代表取締役)

—島根県出雲市



◆耕作放棄地の拡大 49%の生産面積に米、麦、大豆を栽培。「何でも引き受ける」をモットーに、引退した農家から田を借り上げ、耕作放棄地の拡大防止にも貢献する。元々はサラリーマンだったが、亡き父が遺言を遺した00年、農業の世界に。家族経営からスタートし、経営体制の強化や従業員の待遇改善を目指して、09年に法人化した。

グリーンワールド八女(平井隆一郎代表取締役)

—福岡県八女市



◆茶と青汁原料の大麦若葉の生産・加工 3戸の茶農家を中心となり発足。高齢化で管理が難しくなった地元茶園を譲り受け、00年に法人化。現在は22%まで拡大し、大規模協業経営を実現している。年間を通じて雇用確保や工場有効活用のため大麦若葉を導入。茶で培った生産加工技術や施設を生かし、茶部門に並ぶ経営の柱に成長させた。

ヘンタ製茶(邊田孝一代表取締役)

—鹿児島県霧島市



◆ペットボトル飲料開発 茶の栽培が難しい山間地で約18%の大規模経営に成功。昨年、ペットボトルを振るとキャップ内の茶の粉と水が混ざり新鮮な味が楽しめるヒット商品「SHAKE-IT!」(シェイク・イット!)を開発、販売し話題を呼んだ。「お茶の魅力を世界に伝えたい」と従来の発想にとらわれず、茶業発展のために奮闘する。

大地に向かう喜び

第61回全国農業コンクール

耕佑(山村喜久夫代表取締役)

—宮城県栗原市



◆水耕野菜で協業農業 地域のつながりを維持することを目標に、水耕野菜の協業農業を推進して15年目になる。サダ菜、サンチュなど4品目を、寒冷地というハンディを克服して通年で安定供給している。東日本大震災では、停電のために1週間近く養液の循環が止まったが、従業員が人力で養液を流し続け、苗の全滅を防いだ。

村越兼人さん(61)

—埼玉県寄居町



◆ヤブラン全国シェア5割超 全国で初めてヤブラン(ユリ科の多年草)の大規模栽培に成功。年間約70万株を生産し、全国シェア5割以上を誇る。「乾燥に強く、管理がしやすい」ことが注目され、公園や屋上緑化などで需要が増えていた。地元養鶏場から鶏糞を購入して堆肥に活用したり、遊休農地を借り受けるなど地域にも貢献。

返町卓郎さん(63)

—長野県須坂市



◆「実ったものを全て売れる」 72年に実家でブドウやリンゴ栽培を始めた。就農直後、いち早く市場出荷から直売に切り替えた。もぎ取り体験などができる観光農園への転換も図り、先進的な農業を実現。顧客のニーズに合わせた樹種替えも積極的にに行い、「今では実ったものは全て売れる」。果樹園での農作業体験の受け入れにも取り組む。

南駿農業協同組合西浦柑橋出荷部会

(高島敬司部会長) —静岡県沼津市



◆寿太郎をブランド化 75年に発見された温州ミカン的一种「寿太郎」は樹齢が短いと育てにくい品種だが、やや小ぶりで糖度が高く、高値で取引される。光センサーを導入し、全国に先駆けて冷風貯蔵技術を確認。貯蔵庫の温度を貯蔵に適した8度前後に保つなど、品質向上に努めてきた。「生産量を増やし地元経済の推進力に」と意気込む。

岸本健志さん(45)

—鳥取県倉吉市



◆抑制イシカを新ブランドに 父親の農作業中の事故を機に、91年に脱サラ。イシカ栽培を中心とした農業を始めた。6月の収穫後、もう一度植えて秋に収穫する「抑制イシカ」に96年から挑戦、地元の新たなブランドに育てた。当初約1.7%だった栽培面積は約3.6%に倍増。一昨年から若手育成にも力を入れる。「イシカでは負けたくない」

前田勝教さん(67)

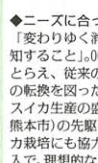
—佐賀県伊万里市



◆計画的な改植で架増収 「伊万里梨」の産地で、反収(約10%当りの収穫量)は地域平均の1.5倍の3%。その秘密は計画的な改植にある。梨は25年生以上になると収量が落ちる一方、7年生未満の若木は実をつけにくい。改植の時期を予測して計画的に若木を育てる。JA伊万里梨部会長として計画的な改植の普及にも努めている。

緒方良博さん(57) 恵子さん(55)

—熊本市



◆ニーズに合った小玉スイカ 極意は「変わりゆく消費者ニーズを敏感に察知すること」。00年、核家族化の流れをとらえ、従来の大玉スイカから小玉への転換を図った。思い切った発想は、スイカ生産の盛んな旧植木町(現熊本市)の先駆けに。長男夫妻のパパリ栽培にも協力。年間を通じた安定収入で、理想的な2世代経営を確立した。

サンフェスタいしかわ友の会

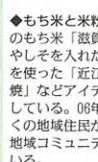
(永井久美子会長) —青森県弘前市



◆弘前ならではの加工品を開発 大量のリンゴが落ちた91年9月の台風被害が起ったきっかけだった。農家の主婦が自家野菜を直売所に出し、初めて自由になる現金収入を得て、意欲が火がついた。「どうふかまぼこ」など当地ならではの農産物加工品の開発に力を入れ、食量など4部門の総販売額は2億4500万円(10年度)に成長した。

甲賀もち工房(河合定郎代表)

—滋賀県甲賀市



◆もち米と米粉で創意工夫 地元特産のもち米「滋賀羽二重」の餅にゆずやしそを入れた「忍ももち」、米粉を使った「近江米めん」、米粉1割焼きたてなどアイデア商品を次々と生み出している。08年設立の農業法人には多くの地域住民が参加。雇用や経済面で地域コミュニティに大きく寄与している。

畜 産

高秀牧場(高橋秀行代表取締役)

—千葉県八千代市



◆都市型酪農経営 家族と従業員4人で、都市化が進む八千代市で約220頭の乳牛を飼育。一度に16頭の牛に対応できる搾乳室や、作業しやすいように仕切りをなくした牛舎を導入し、省力化に成功した。消費者においしい牛乳を届けるために品質にこだわり、一頭一頭の乳成分データを測定。牛の健康状態も常に把握するよう努めている。

フリーデン(大谷康志代表取締役)

—神奈川県平塚市



◆DNA登録で安全追求 養豚業界最大手で全国に9牧場を構える。牧場では出荷する全ての豚のDNAを登録するなど徹底した品質管理を行っている。「安全、安心、おいしい」を追求し続け、生産から加工、流通、販売まで手がける。生産した豚のブランドは「やまと豚」。休耕地で飼料米を生産し、地域循環型農業にも取り組んでいる。

丸尾建城さん(59)

—兵庫県赤穂市



◆「牛を鳴かせない」飼育 地域と共存できる酪農を目指す。環境に配慮し、汚物の完全処理はもとより、牛舎周囲にアンモニア臭を吸着する効果があるといわれるツグの植栽にも取り組む。「牛を鳴かせない」が飼育の基本で、食べる量は牛に決めさせて、飼料は牧草・飼料が常時入っている。安全・安心な牛乳提供のため牧場の自家栽培も続ける。

藤江昭雄さん(71)

—島根県出雲市



◆前回の販路が強みに 地元産の米を飼料に使う飼育法でブランド和牛「まい米牛」を開発。ほとんど例のない飼育法だったが、「人と畜とのつながり」という信念を貫いた。「藤江」の冠をつけた直営スーパーや焼き肉店など、自前の販路を持つ。飼育から販売までを手がけることで流通履歴が明確になり、消費者の安心にもつながっている。

みさおちゃんファーム(岡崎操代表取締役)

—山形県河北町



◆買い手志向を徹底 「消費者が欲しいものを把握して栽培する」と、一貫した買い手志向の栽培が特徴。和菓子の商品化にも関わるなど、農業に限定しない異業種交流にも「他で面白いものを作るのは面白そうだから」と積極的だ。90年に脱サラし、就農した。収益性の悪い自産目を廃止するなど消費者ニーズに合わせて作付けを見直している。

主催 毎日新聞社、鳥根県
後援 農林水産省、出雲市など
特別協賛 アルファー食品、エア・ウォータ
一、小松電機産業・人間自然科学
研究所
協賛 吉備国際大学、日本トリム、ヒガシ21など

私たちは「第61回全国農業コンクール 全国大会」を応援しています

アルファー食品株式会社 | エアウォータグループ | 小松電機産業株式会社 | 財団法人人間自然科学研究所 | 吉備国際大学 | 株式会社日本トリム | 株式会社ヒガシ21